

ボストン交響楽団  
バストロンボーン奏者  
ダグラス・ヨー

---

## 人生のジグソーパズル

質問者とのやりとりは、たいていこんな具合に始まります。

「ヨーさん、あなたは世界でもっとも素晴らしいオーケストラの一つであるボストン交響楽団のメンバーです。そこに入るためにももちろん、一生懸命努力なさったのでしょうが、まだオーケストラで働いたことのないわたしたちに、ヨーさんがどうやって今いらっしゃるにところに辿り着いたのかを少し詳しく教えて頂けませんか？オーディションに受かるために必要なことをまとめてみようと思ってもなかなか難しいのです。何か、こういった音楽人生のジグソーパズルを解くためのヒントや秘密があるのでしょうか？」

この質問の主が、わたしが個人的に教えているトロンボーンの生徒であろうと、講義、セミナー、または修士課程コース参加者であろうと、この時点で深い話を始めるのに十分な突破口を開いてくれているわけです。質問者は、わたしがどのように今の地位に至ったかを話す中で、何か自分にとってヒントとなり

得るものを得ようと望んでいるわけです——わたしはもちろん、その話をするつもりです——が、同時に時間をさいて、質問者の問いに潜む、より重要な意味合い、「どのようにして人生のジグソーパズルを解くことができるのか」についてもお答えしたいと思います。

わたしはウィートン大学卒業後、そのまま大学院に進むのはやめようと決心していました。それで、妻が卒業することになっていたコロンビア大学の所在するニューヨークへと移りました。3週間経って、トロンボーンの仕事の話が電話でもちかけられて来ないのが分かった（ニューヨークに知り合いはいなかったのですから、当然そんな話は舞い込むはずがないということに気付くべきだったのですが）、サラリーマンとしてオフィスで働きました。というのも、単に生計を立てなければならなかったからです。やがて少しずつですが、プロのトロンボーン奏者とコネクションを作ることができるようになり、数ヶ月もすると何人かの奏者の代理で定期的

に演奏するようになりました。そのほとんどがブロードウェイのショーでした。

フリーランスの仕事だけでは、日中の仕事をやめるというわけにはいきません。一年ほどこの生活を続けた後で、わたしは大学院に行く決心をしました。2年間、パートタイムレベルでニューヨーク大学の修士課程で学ぶ一方、日中は事務職のアルバイトに就いていました。ニューヨーク大学で学んでいるうちに、音楽関係のコネクションが更に広がり、フリーランスの仕事も増えていきました。しかし、その仕事も商業的なサウンドとスタイルが中心となっていたため、わたしのトロンボーン演奏が微妙に変化していくのがよく分かりました。わたしには、まだオーケストラで演奏したいという夢があったため、1979年、ニューヨーク大学修士課程修了を待って、ニューヨークとスタジオ／商業関連／ブロードウェイシーンを離れる決意をしました。長い間、高校ブラスバンドの指揮に興味を持っていたこともあり、そのための面接を

受けた結果、ニュージャージー州エディソンに職を得ることになりました。2年間、そこで高校生バンドを教えました。自分の人生の中ではストレスの多い時期でしたが（給料は安く、仕事は大変で、しかも長女が誕生したばかりという状態でした）、高校生たちを教えるのは大変楽しいことでした。また、その仕事をしていて良かったことは、大きなブラスバンド室を自分のトロンボーン練習のために自由に使用することができたということでした。その機会を最大限に利用して練習を続け、来たるべきオーケストラのオーディションに備えました。1980年から1981年にかけて、プロのオーケストラのオーディションを5回受けました。そのうちの4回は最終審査まで残り、やがて1981年にはボルチモア交響楽団でバストロンボーン奏者として、職を得ることができました。1981年から1985年までボルチモアで演奏を続けましたが、中でも、素晴らしいトロンボーンセクションで演奏できたこと、新しく建てられたばかりのコンサートホール、メイヤーホフホールで演奏できたことは、本当に良い経験だったと思っています。しかし、ボストン交響楽団でバストロンボーン奏者の椅子が空いていると聞いたとき、もう一度だけオーディションを受けてみようと思ったのです。

トロンボーンを初めて吹いて以来、ボストン交響楽団で演奏することがわたしにとっての夢だったからです。1984年5月に初めてボストン交響楽団のオーディションを受けました。オーディションに合格はしたものの、小澤征爾はわたしを正式に雇ってはくれませんでした。わたしを雇うべきかどうか思案した末に、ボストン交響楽団のタングルウッド公演とヨーロッパツアーに伴う6週間の雇用を約束してくれました。わたしは喜んでその申し出を受け入れました。これは、「仮採用」ではないと念を押されましたが（1984年12月にまたオーディションを受けることになっていました）、小澤がわたしの演奏によく注意して耳を傾けていること、またトロンボーンセクションがわたしがどう楽団に馴染むかに注目していることは分かっていました。

結果的には、再びオーディションを受けて職を得、1985年5月からボストン交響楽団で正式に演奏することとなりました。プロとして、わたしは大きな目標を達成したわけです。素晴らしいオーケストラで演奏できることは大変な特権であり、喜びです。しかし、ボストン交響楽団の一員として成功を味わう一方で、人間の人生には単にいいオーケストラで職を

得ること以上の意義があるはずだと思っています。わたしの場合もやはり、今簡単に説明したこと以外に、もっと話の続きがあるのです。大切なことは、わたしが前に触れた重要な問い——どのようにして人生のジグソーパズルを解くことができるのか——に対して一人一人が解答できるようになることなのです。これは、ただ良い問いということだけに留まらず、事実、究極の問いだと言えるでしょう。もちろん、ここでトロンボーンを吹くことやオーディションを受けることについて、わたしが知っている限りのことをお話しすることもできるでしょう。また、わたしがどんな歌口やどんなメーカーの楽器を使っているか、ウィリアムテル序曲を演奏するときは舌をどこに付けるべきか、また、音をいかにスムーズ且つ敏速に移行させることができるかなど、お教えすることもできるでしょう。あなたは、わたしのアドバイスをしっかり受け止め、必死に練習し、やがてはオーケストラに籍を置くことだってできるかもしれません。夢がかなうのです。しかし、太陽が毎朝、必ず顔を出すのと同じように、いずれ、あなたにも再び自問するときがやってくるのです。どのようにして人生のジグソーパズルを解くのか、と。その問いの答えは音楽やトロンボーンとは何ら関係ないも

のです。ものごとの優先順位や事の最初のおこりというものに関係があるのです。

プロ奏者の同僚を見まわすと、こんなにも不幸で惨めな人たちがいるのかと、わたしはいたたまれない気持ちにさせられます。オーケストラの団員に限るといっわけではありません。事実、たいていどこに足を運んでもそういう人たちにお目にかかります。何年も必死に努力して、あこがれの地位に上りつめたにもかかわらず、また、十分な収入と美しく飾られた家があるのにもかかわらず、わたしのところにやって来てはこう言うのです。「何年も自分を押さえて練習してきたというのに、自分に残されたのはたったこれだけなのか!？」

残念ながら、人が仕事に生きがいを見出そうとするとき、だいたいにおいて空しさに行き着くことになるのです。音楽（一般職、教育関連、スポーツ、芸術の類を問わず、あらゆる訓練を伴うもの）が自分の神となるならば、結局は失望させられることでしょう。より多くを求めてしまう人間の欲望、所有しているものに満足がいかない人間元来の性質、また敬うべき権威を軽視する態度のおかげで、わたしたちは、自分に残されたのはたったこれだけなのか、と

辺りを見まわしては呟くことになるのです。

しかし、喜ばしいことに、その疑問への答えは「否」なのです。自分に圧倒的な自信を持つという気持ちはよく分かります。十代のころのわたしは、自分の能力に自信過剰で、高慢なまでに自分を売りこみ、まさにプライドのかたまりという状態でした。わたしは自分の運命の決定者であり、人生という名の船の船長でもありました。唯一従わなければならないのは、己でしかありません。「己を信じよ」とある人は言うでしょう。つまり、「もっと頑張りさえすれば成功できる」というわけです。

わたしの父が40歳にしてニューヨークでの職を捨て、専任の牧師職に就くという決意をしたとき、わたしにはその道理が到底受け入れられず、ただ腹を立てることしかできませんでした。わたしの人生に宗教の入りこむ余地などなかったのです。わたしが唯一知っていた神、また唯一望んでいた神は、トロンボーンでした。わたしは、音楽という祭壇のもとで礼拝を捧げていたのであり、敬虔なクリスチャン家庭に育ったのにもかかわらず、また毎週教会に通っていたのにもかかわらず、神についての真の知識を得ることもなく、神を知ろうともしま

せんでした。わたしが聖書を読むのは、その誤りを証明するためか、聖書を理解不可能だと決め付けるためでしかありませんでした。

新たな州の新たな学校に転校するということで、わたしのプライドは傷つきました。わたしは周りに好かれることもなく、ただ自己中心の気持ちでいっぱいでした。新しくできた同級生たちに対して優越感を抱いていたのです。わたしは、益々、自分自身を頼りにするようになり、それこそが生活の中の問題をみな解決してくれるのだと信じるようになりました。音楽ではすぐにもりっぱな成績を修めたので、わたしはとりわけ神を必要とする状況にはいかなかったのです。しかし、そうした成功にもかかわらず、わたしの心の中にはぽっかりと大きな穴が空いていました。わたしは、全てはうまくいっている、心が落ち着かないでいるのは実は誰か自分以外の人間のせいだ、と自分を何とか納得させようとしてきましたが、明らかに心の中には空しさというものが存在していました。わたしはその空しさと戦うべく、大声をあげてそれを蹴飛ばしたりしましたが、その空しさはわたしの心の中からどうしても出て行こうとはしません。わたしが何を所有していようと、自分の人生に空いた穴は、

まるで癒えることのない傷のように鋭い痛みを伴って、「決して全てがうまくいっているわけではない」と思い起こさせるのでした。

高校ブラスバンドでいっしょに吹いていた女子クラリネット奏者が、自分の通っている教会の青年会に誘ってくれたときには、すぐにノーと答えました。教会の青年会に参加するなど、わたしには到底考えられないことでした。しかし、わたしは例の彼女がそうも諦めずに誘い続けてくるだろうとは思ってもみませんでした。彼女は毎日わたしを誘い、わたしは毎日断っていたのです。これが何週間か繰り返されるころには、わたしはこのお決まりのやりとりで飽き飽きしてしまいました。一度顔さえ出せば、彼女もあとは放っておいてくれるだろう、そう考えて一緒に教会に行くことを承知しました。その夜の青年会プログラムは映画、『十字架と飛び出しナイフ』で、デービッド・ウィルカーソンという名前の田舎牧師が、イエス・キリストにある希望のメッセージをギャングメンバーらに伝えにニューヨークくんだりまでやって来るという実話に基づいたものでした。映画を見ていて、わたしはすぐに自分自身をギャングメンバーの一人、ニッキー・クルーズに重ね合わせま

した。ニッキー・クルーズのどうしようもない傲慢さと自信過剰でいばった態度は、みな自分に憶えのあるものでした。時間が経過し、映画が神と人とに反逆して生きた人間にやってくる当然の報いを映し始めると、わたしは不快になっていきました。脈拍が上がり、手には汗をかき始めたのです。わたしは人生で初めて自分自身ときっちり向き合うことになり、説明できない不可思議な方法で、なぜ自分の人生というジグソーパズルにパズルピースが一つ欠けているのかを悟ったのです。

その夜、名前は分かりませんでした。わたしを優しく気遣ってくれた人たちのおかげで、自分の優先順位は全く間違いであり、何年も自分自身が人生の王座に座っていたという事実を自分で口に出し、神に告白することができたのです。これが人生を変える分岐点になろうとは、はっきり理解していたわけではありませんでした。わたしは素直に神に祈りました。実際、神に助けて頂きたいということ以外は、何を祈っていいのかわからなかったのです。わたしは、イエス・キリスト——その存在を知りながらも、ずっと拒み続けてきたお方——に、わたしの人生の導き手になってくださるようお願いしたのです。わたしは従順な気持ちで、自分

の将来を自分勝手に決めたいという思いを捨て、イエス様にこの船の舵取りをして下さるよう申しあげたのです。1972年5月、この運命の日の夜、イエス様はわたしの声に耳を傾けて下さり、その祈りに答えて下さいました。以来、全てが変わったのです。

それから数年かけて、わたしは自分の人生の王座から退き、もともと神のものであったはずの王座をその正当な持ち主にお返しするようになりました。しかし、これは、わたしがイエス・キリストに舵をお任せした瞬間に、全てがた易く、幸せに満ちた、ということではありません。自分には、まだ昔からの悪習慣が残っていて、それらに対処していく必要がありました。神の言葉、聖書を読んでいて多くの疑問を抱きました。結婚して子供が二人生まれましたが、大きな問題にぶち当たりました。一人の子供は、肺炎にかかってもう少して死ぬところでしたし、もう一人の方も交通事故に遭い、あわやというところでした。わたしの母は若くしてガンにかかって亡くなりました。また、わたし自身は何年もの間、音楽とは全く関係のない仕事に就かなければならず、苦しみました。ですから、「どうして?」と言いたくなる気持ちがよく分かります。

しかし、神は全てが楽しく、全てがうまくいくようになるとはお約束なさいませんでした。神のお約束は「いのち」に関することなのです。イエス様はこうおっしゃいました。「わたしが来たのは、[彼ら]がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。(ヨハネの福音書 10 章 10 節)」わたしはようやく、自分が思うのとは異なる、神の目から見た成功というものを定義し直す必要があるということに気付いたのです。そして、その結果少しずつ分かってきたことは、神がお考えになる成功とは、多くの場合、人が考えるような成功とは異なっていること、なぜならそれは、わたしたちがただの人間に過ぎず、神を自分たちが把握できる範囲内のみ理解しようとしているためであるということでした。そうした人間的な考えは非常に危険です。なぜなら、わたしたちは神を単なる人間にしてしまっているからです。神は神であられ、宇宙の創造主、全ての源であられ、未来永劫それは変わることがないのです。神には、人間が抱く公平や正義の概念にとらわれる必要がありません。神ご自身がまさに公平、そして正義であられるからです。神は聖くあられ、わたしたちが聖くなるよう求めていらっしゃるのです。御子イエスの犠牲を通して、拒まれるとは一体どんなこと

なのか、また痛みを感じるとはどんなことなのか、神はお分かりになっていらっしゃるのです。わたしには、「でも、神様、あなたにはお分かりにならないのです」と言う資格がありません。神はわたしよりも先にご自身でそのようなところを通られ、身をもって経験なさっておいでだからです。そのため、わたしの気持ちをよくご存知になられるのです。わたしは、このホームページの『オーケストラオーディション：準備と実際』の中で、オーディションを受け始めた当初、なぜ人生にとって、もっとも重要であるはずの一つの真理を十分に理解していなかったかをお話ししました。わたしは、神が自分にトロンボーン奏者としての才能を与えてくださっていると自信を持ち、オーケストラこそが自分のあるべき場所だと堅く信じて、こう祈ろうとするわけです。「神様、どうぞ、わたしがこのオーディションに受かるようにして下さい。わたしがどんなにこの職を得たいと思っているかご存知のはずです。もし、この職をお与え頂きましたら、あとは自分でやります。神様のお手をわずらわせるようなことはありません」と。しかし、神はそのように放っておかれることを好まれません。神は、わたしの人生の中で一番大切なものとなることを望まれていたからです。(そし

て、今もそう望まれています。)しばらくしてようやく、わたしは悟ったのです。わたしのあるべき場所とは、自分が欲するか否か、同意するか否か、また好むと好まざるかに関わらず、神がわたしに望まれている場所なのだ。この単純な真理には、非常に奥の深いものがあります。神がすでにわたしに対するご計画をお持ちだということに、どうして、わたしのようにただの人間に過ぎない者に自分のあるべき場所などを決められるでしょう。この概念がよく分かったため、わたしは、オーディションを神がわたしのためにご計画してくださった人生への窓だと、とらえることができるようになりました。ただオーディションに合格するようと祈る代わりに、その過程を通してどんなことを教えて頂けるか分かるようにして下さい、と祈り始めました。そして、ついにわたしがずっと求めてきたものを得ることができたのは、決してわたしに力あってのことだけではありません。わたしは、自分がボストン交響楽団で職を探して受けたオーディションで、完璧な演奏ができなかったことに対して神に感謝しています。完璧でなかったのにもかかわらず雇ってもらえたことで(普通、最終オーディションで吹いたハーリ・ヤノーシュで、音をただ外しただけでなく、

高い「シ」の音を何と完全に弾き損なってしまった奏者を指揮者が雇うなんてこと想像できますか？)、オーケストラに入ることが叶えられたのは、ただ自分に才能があったためではなく、むしろ主権者である神の定められたご計画によるものだと分かったのです。もし、それが神のご計画ならば、わたしが音を弾き損なったというだけで、どうして神のご意志を阻むことになると言えるでしょうか。

成功と失敗を経て、また、うまく行っているときと試練のときとを経て、わたしは神に近づくこと、より神のお心とご意志に従うことを求めるようになりました。神の御言葉である聖書は、わたしが出会った中で最も偉大な教えの手段であり、

また同時にわたしにとって大きな慰めです。もし、あなたがわたしのようにイエス様をご存知なら、わたしがお話ししていることをご理解して頂けるでしょう。もし、そうでない場合は、キリストと共に歩む人生について考えて頂けたらと思います。キャンパス・クルセード（彼らが、このホームページをインターネットに開設する手助けをしてくれました）は、「人はみな神を必要としている」という真理を多くの人に理解して頂けるよう、素晴らしいトラクトを作成しました。この『四つの法則』は簡潔に書かれてはいませんが、人生を変えることのできる真理について語っているという点で、大変力のあるものです。（日本語版『四つの法則』は、<http://www.ccci.org/laws/japanese/>でご覧頂けます。）

もしよろしければ、キリストにある人生についての詳細をお送りすると共に、日々どのように聖書がわたしを慰め、強め、助けてくれているかを個人的にお話しさせて頂きたいと思っています。

人生のジグソーパズルに対する答えですか？それは、聖書がいう通りです。「だから、神である主は、こう仰せられる。『見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは、試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊いかしら石。これを信じる者は、あわてることがない。（イザヤ書 28 章 16 節）』」

イエスこそが、そのかしら石であり、わたしは自分の人生をその上に建てたのです。

本文はダグラス・ヨー・トロンボーン・ホームページ（<http://www.yeodoug.com/jintro.html>）の一部です。

©1999 Douglas Yeo. All rights reserved. Permission is granted to make unlimited copies of this article for distribution as long as this notice appears.

©1999 Douglas Yeo. 全ての著作権はダグラス・ヨーに帰す。著作権所有者名が明記される場合に限り、本文を複写・配布することを許可する。